

2022.9.10

古代史を解明する会

日本における農耕と稲作の起源

清水徹朗

1. 日本の歴史・文化における米・稲作の重要性

原田信雄『コメを選んだ日本の歴史』(2006)

1949年 栃木県生まれ、明治大学卒、国士舘大学教授

日本人は米食悲願国民(渡部忠世)

米は「**聖なる食物**」・・・餅、粥、赤飯、酒 = お祝いや祭に欠かせない

力の源泉・・・・・・カうどん、カ餅

米文化・・・・・・味噌、醤油、せんべい、日本酒

麦は肉、乳とセット、粉食(パン、麺)

柳田国男『海上の道』(1961)・・・・日本の農耕文化・神話の南島の要素

網野善彦は水田中心史観を批判(非農業民の役割)

稲作、青銅器、鉄器を伝えたのは朝鮮半島の人々(弥生系渡来人)

戦争、クニの発生

「農は天下の大きな本なり。民の恃みて生きる所なり。」(日本書紀「崇神記」)

天皇が稲作に関わる国家最高の司祭となった……新嘗祭、大嘗祭、伊勢神宮

古代律令国家は水田稲作を社会的生産の基盤に置いた

← 天武天皇の時代に制度化

租税、公地公民、口分田、開墾の奨励

中世の荘園

太閤検地 → 近世石高制、年貢

米が最大の商品となる……廻米、河川網

新田開発、一方で飢饉の発生



上山春平編 『照葉樹林文化－日本文化の深層』(1969)・・・シンポジウムの記録

上山春平(1921－2012)は京都大学教授(哲学)

京都大学の学問の系譜…………今西錦司、梅棹忠夫、桑原武夫、梅原猛、川喜多二郎

今西錦司らによるアジア地域フィールド・ワーク

柳田国男の学問は稲作文化の範囲を出ていない

＝稲作こそが日本文化の基盤であるというゆるぎない信念

柳田国男「山人考」(1917)、『山の人生』(1926)

江上波夫の騎馬民族国家説を批判(天神と国神、倭人と先住民)

マルクスの歴史観を批判的に克服する

和辻哲郎『風土』(1935)…………砂漠、モンスーン地帯、牧場

中尾佐助は縄文文化を照葉樹林文化の一環としてとらえた

照葉樹林…………葉が厚くテカテカ光る常緑広葉樹林(カシ、クスノキ、シイ、ツバキ)

ギリシャ、ローマのオリーブは「硬葉樹」

ブナ、クヌギ、クリは「落葉広葉樹」

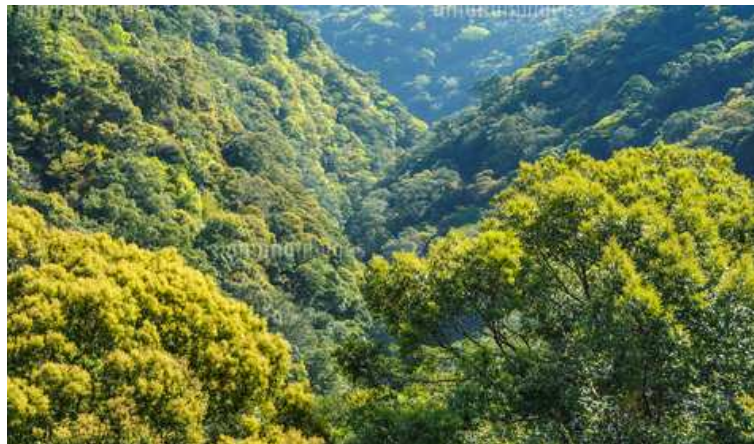
雲南省、東南アジア北部は照葉樹林帯 ……深い森、日本の「神社の森」

照葉樹林の食用植物……大豆、イモ、雑穀、イネ、シソ

水さらし技術、茶、酒、発酵食品(納豆、味噌)、モチ、ウルシ、竹、養蚕

縄文農耕との関係

信仰……先祖神、土地神、穀物神



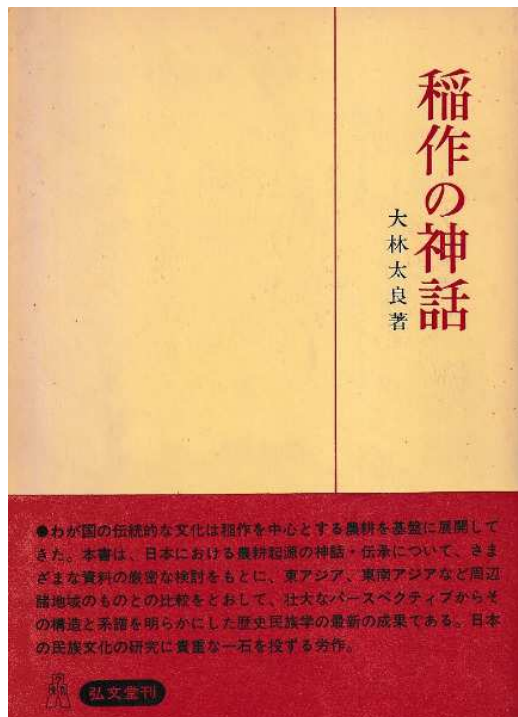
大林太良『稲作の神話』(1973)

1929年東京生まれ、東大経済学部卒、フランクフルト大学、ウィーン大学、ハーバード大学で民族学を学ぶ。東京大学教授(民族学)

日本、アジアにおける稲作の神話に関する研究、民族学からの日本文化起源論

1. オオゲツヒメ型神話

古事記、日本書紀の作物起源神話……神の生体、死体から作物が発生
インドネシア、東南アジア、朝鮮、中国の神話との共通性



2. 穂落神

鶴や白鳥が落とした稲穂を植えて実を实らせた
日本各地に伝承が残っている、鶴の恩返し、舌切雀
朝鮮、中国、東南アジアにも同様の伝承がある

3. 烏勸請

烏に儀礼として米を食わせる……神話の儀礼化
烏は神の使い
日本各地で行われている(小正月等)
朝鮮、中国、東南アジアにも同じ儀礼がある



4. 穀物盗み

狐が中国(インド)で稲を盗み日本にもたらした
老女が隣人の田から稲を盗んでマレビト(訪問者)をもてなした
中国、インドネシア、アフリカにも同様の神話がある

5. 流米洞伝説

米が流れ出る泉・洞窟が人間の貪欲のため涸れる
朝鮮、中国の神話

2. 農耕の起源と縄文農耕論

小野武夫『日本農業起源論』(1940)

1883－1949、大分県生まれ、農業史・農民経済史の先駆者、法政大学教授

文献史学……古事記、日本書紀等の文献に基づく歴史研究

その一方で、考古学の研究が進展(実証的方法)

→ 両者の融合、連関が必要

和辻哲郎『日本古代文化』(1920)は両者の融合を試みたが不十分

アジア、南洋諸島の視点、人類学、言語学、民族学的方法が必要

日本の民族構成……石器時代、アイヌ人、縄文式文化

出雲朝文化民は弥生式文化民で国津神系の先住民

「等しく弥生式文化民に属する天祖系種族がこの島国に渡り来て、九州の一角に上陸し、その後、東北を目指して経路に就き、沿岸の先住民を統一し、遂には大和に朝廷を組織して日本国家を成立するに至った。」

……「高天原」はどこかという問題

「縄文式文化時期における農耕の存否を決すべき積極的証拠はない。」

……肯定論と否定論の論争

「しかし、人口が増加し一定地に集落を形成する頃になれば、野草、狩猟だけでは不十分であり、**作物を栽培していたことが推察される。**」

縄文式文化民の農業(畑作)の起源もアジア大陸にある。

弥生時代になって稲作が行われる。

稲の原産地はインドのデカン半島起源説が有力。言語学的にもインド起源であることが推察される(Urihi)

日本への渡来としては北方説と南方説があるが、北方説(朝鮮半島経由)が有力

耕地保有形態、各種農作物の起源

農具、肥料、家畜、貯蔵、農民の生活(衣食住)

中国大陸における農業、国家との関係

鉄製の農具を導入し生産力が向上

用益慣行、畑作(火耕)の研究

中尾佐助『栽培作物と農耕の起源』(1966)

1916－93、京都大学農学部卒(遺伝育種学)、大阪府立大学教授

世界の農耕文化基本複合は4系統

←世界の農業の四大起源説(マードック[米国の民族学者])

1. 根菜農耕文化(アジア、アフリカの熱帯地域)

バナナから始まった農業(栽培バナナ)

ヤムイモ、タロイモ、サトウキビ、サゴヤシ

無種子農業、マメ類・油料種子を欠く

掘り棒の農業、焼畑、ブタ、ニワトリの家畜化



2. 照葉樹林文化(東南アジア北部、中国南部)

クズの根からデンプンをとる……水さらし技術

雑穀栽培をとり入れる

茶、絹、ウルシ、ミカン、シソ、酒



3. サバンナ農耕文化 (アフリカ中部、インド中部[半砂漠])

雑穀 (アワ、キビ、ヒエ)、マメ類 (インドのダル)

果菜類 (ウリ、ナス、ヒョウタン、スイカ)、油料作物 (ゴマ、ヤシ)

家畜を欠く

4. 地中海農耕文化 (西アジア、欧州南部、エジプト)

ムギ類……コムギ、オオムギ、ライムギ、エンバク

ウシ、ヒツジ、ヤギ、ウマの家畜化

畑作灌漑

他地域への伝播



5. 新大陸の農耕文化 (南北アメリカ)

マヤ、インカの農耕文化

トウモロコシ、ジャガイモ、キャッサバ、マメ類

畑作農業



6. イネのはじまり

イネは湿地の雑穀……インド東部、西アフリカが起源

アジアのイネの原産地はインド東部 (サバンナ農耕文化の一部)

野生イネと栽培イネ

陸稲 (根菜農耕文化、焼畑) と水田稲作

宮本一夫『農耕の起源を探る－イネの来た道』(2009)

1958年島根県生まれ、京都大学文学部卒(考古学)、現在九州大学教授

東アジア、日本列島で穀物農耕が始まる過程

日本列島には野生穀物は存在していない←ヒエを除いて他地域から伝播したもの

[縄文農耕が意味するもの]

縄文社会から弥生社会への変革……環濠集落、支石墓、水田の出現、弥生土器

朝鮮半島の大陸系統の人々の渡来、在来の縄文人との交配

外的な影響と内的な変革

東アジアで最初に農耕が始まったのは中国大陸(1万年前)

華北でアワ、キビが栽培化、華中でイネが栽培化

イネはBC4000年に黄河中流域に広がり、BC2500年に山東半島末端に達した
周辺には狩猟採集社会が存在していた

[中国東北部・朝鮮半島の農耕化]

- ① BC4000年紀後半 アワ・キビ農耕が広がる
- ② BC3000年紀後半 アワ・キビにイネが加わる
- ③ BC2000年紀半ば 加工石器、灌漑農耕が広がる
- ④ BC8世紀 北部九州にイネが伝わる(山東半島、朝鮮半島南部からの伝来)

1. 環境の変動と農耕の広がり(第1段階)

15000年前の気候変動(氷河期が終わり温暖化)

→ 野生穀物の採集への関心が高まる

その後、一時的に冷涼乾燥期が訪れる

→ 収穫量の減少が野生種から栽培種への馴化の動機となった

BC6000年頃……華北でアワキビ農耕が広がる、石器・製粉具の伝播

BC3300年頃……朝鮮半島南部にアワキビ農耕が伝わる

← 寒冷化に伴って北から南へ人々が移住

2. イネ栽培の始まり(第2段階)

1万年前(BC8000年)……長江中流域でイネの栽培が始まる

BC5000年頃……黄河中下流域に稲作農耕が伝わる

BC2500—2000年……山東半島、遼東半島に栽培イネが広がる

(アワキビ農耕にイネが加わる)(龍山文化)

同時期に朝鮮半島中南部にイネ栽培が伝わる

3. 農耕社会の誕生(第3段階)

BC1600年頃 寒冷化

山東・岳石文化の拡散→遼東半島へ

岳山文化……龍山文化が変化した初期青銅器文化

農具、石包丁、石斧、木材加工具の発達

水田遺跡、環濠集落

プラントオパール、水月湖年縞堆積物の研究

→ 寒冷期と農耕拡散の関係

BC1000年頃の寒冷期に朝鮮半島南部から北部九州に稲作が渡来

4. 縄文から弥生へ(第4段階)

縄文中期以前にもエゴマ、シソ、ヒョウタンなどの栽培植物が存在

(「園耕段階」で「農耕」ではない)

縄文中期末に栽培穀物が流入

朝鮮半島と日本列島の交流(漁労民、土器)

アワキビ農耕は九州に広がらなかった

気候変動に伴う農耕渡来民の南下(BC800年)……環濠集落、支石墓、土器

→ 渡来系弥生人の成立、縄文人との交配

佐々木高明『稲作以前』(1971)

1929－2013、大阪生まれ、京都大学卒(地理学専攻)、国立民族学博物館教授

「縄文時代は採集・狩猟の時代で農耕は存在しない」というのが「学界の常識」
しかし、その後、縄文時代にも栽培作物が存在したことが明らかになってきた
柳田国男『木綿以前の事』(1939)・・・衣類原料としてかつて麻が広く使われていた
日本文化の基層を探る・・・照葉樹林焼畑農耕文化の伝播

1. 縄文農耕論をめぐって

大山拍(大山元帥の二男)が縄文中期に農耕が行われていたことを主張(1927)

← しかし、山内清男(考古学者)が反論

藤森栄一(1911－73)・・・八ヶ岳西麓で遺跡調査→縄文農耕の存在を主張(1950)

小林行雄『日本考古学概論』(1951)・・・縄文農耕の可能性に言及

坪井清足「縄文文化論」(1962)・・・それまでの縄文農耕論を整理

江坂輝弥『日本文化の起源』(1967)・・・縄文農耕を主張

国分直一『日本民族文化の研究』(1970)・・・縄文時代のイモ栽培を主張

藤森栄一『縄文農耕論』(1970)・・・それまでの研究成果をまとめた本

稲作以前の焼畑農業・・・アワ、ヒエ、ソバ、大豆、小豆、イモ類

陸稲は主作物ではなかった

2. 稲作以前の農業

日本で行われていた焼畑農業(九州山地、四国、中部山地、奥秩父)
焼畑の意義……焼土効果(灰が栄養分になる)、雑草抑制、開墾、地力回復
ヒエ、アワ、サトイモ、豆類
東南アジア、インド高原での焼畑
照葉樹林型の焼畑農耕文化

3. 稲作以前の文化伝統

イモ(サトイモ)の重要性(坪井洋文『イモと日本人』1979)
儀礼的共同狩猟、山の神信仰
田植技術の発生 ←シコクビエの移植栽培

4. 稲作文化とその基底にひそむもの

「稲作以前の農耕文化」と「稲作文化」の関係
弥生時代に入って成立した稲作文化
南方的習俗の影響
日本農耕文化の原点を探る
農耕の存否で縄文文化と弥生文化を明確に分けることはできない
稲作文化の基底に「稲作以前」の縄文農耕文化が存在した

3. アジアにおける稲作の歴史

中村慎一『稲の考古学』(2002)

1957年東京生まれ、東大大学院卒(考古学)、金沢大学教授

1. 稲作考古学の視点

アフリカイネとアジアイネは独立に栽培が始まった。

野生種→栽培化

脱粒性の消失、種子休眠性の消失、芒(のぎ)の退化、登熟期間の均一化

種子の大型化、種子数の増大

2. 考古学からみた初現期の稲作

稲作長江起源説……巖文明「中国稲作農業の起源」(1982)

←長江中流域での遺跡発掘 → **雲南・アッサム起源説は衰退**

稲作開始時期…BC5000－6000年 ←どこまで溯れるかは不明(「お国自慢」)

東南アジア……タイ北西部(ホビアン)、タイ東北部(ノンノクター、バンチェン)

古い遺跡が発掘されたが、年代については論争がある

インド…長江よりも古い稲作があったと発表(1980) ←根拠に乏しい

インドでのイネ利用はBC3000年紀半ばを遡りえない

インドにおける農耕の開始はBC7000千年紀末まで溯れる

3. アジア稲作多元説とインディカ・ジャポニカ問題

渡部忠世『稲の道』(1977)……雲南・アッサム起源説

中川原捷洋『稲と稲作のふるさと』(1985)…稲遺伝子分析で雲南・アッサム起源を裏づけ
→しかし、雲南・アッサムでは古い稲作遺跡が見つかっていない(BC3000年頃)

「中国での稲作はBC7000－6000年頃に長江中下流域で始まった」

ただし、インド、東南アジアで中国と独立に稲作が開始された可能性は否定できない

中国でなぜ稲作が始まったか……13,000BP(BC11,000年)に厳しい寒冷期

多年草ジャポニカの一部が一年草に変化し、イネの胚乳が増大

その後の温暖化で野生イネが変化、人口増大と陸地の減少→稲の栽培化

熱帯アジアではイネの栽培化は遅れる

アジアイネ多元説(佐藤洋一郎)……ジャポニカとインディカの起源は異なる

4. 稲作の進化

野生イネの採集→栽培化

人口増加、耕作具・収穫具の発展、灌漑水田の成立、稲作社会の成立

5. 稲作の伝播

渡来人主体説、伝播のスピード、山東半島、朝鮮半島への伝播(BC2000年)

日本には朝鮮半島南部より伝わる

6. 稲作文明論の課題

長江文明論、ハイブリッドな稲作文明(インド、中国、日本)

渡部忠世『稲の道』(1977)

1924年神奈川県生まれ、京都大学農学部卒、京都大学農学部教授(作物学)

1. 稲の道ーひとつのアジア文化史ー

古代アジアの物資交流の道…シルクロード、天馬の道(中国から中央アジア)

陶磁の道(「海のシルクロード」)

アジア栽培稲の伝播ルート……「稲の道」

パピロフの理論……発祥地に多様な変異集団が形成される

陸稲と水稲、ジャポニカとインディカ

アジア稲(オリザ・サティヴァ)とアフリカ稲(オリザ・グラベリマ)

2. 古煉瓦のなかの粃は語る

古煉瓦の中の粃殻を研究

東南アジアの遺跡調査

粃型(粃長と粃幅)を計測し分類

…ラウンドタイプ、ラージタイプ、スレンダータイプ

3. 埋もれた煉瓦粃を求めて

タイ、カンボジア、ビルマ



4. 粳型からみた「稲の作物史」

バンチェン遺跡、ノンノクター遺跡(BC3000年以前、一部はBC4000年)

穀粒圧痕がある土器片を発見

「栽培稲の起源地は東南アジアから遠くないところにある。」

ラージタイプはモチ陸稲、ラウンドタイプはモチ水稻

モチ稲栽培圏……東南アジア北部

インディカ水稻……ウルチ水稻

→インドシナ半島における過去1500年の栽培稲の変遷過程を辿る

5. ふたすじの道

・メコン系列……雲南地方に発しラオス、タイを南下

・ベンガル系列……インディカの経路、メコン系列より遅れて登場

ベンガル地方(インド東部)からインドシナ半島に広がる

6. インド亜大陸への旅

インドでの調査

北インドでは古くからジャポニカ稲が分布していた

南インド、デカン高原、スリランカ

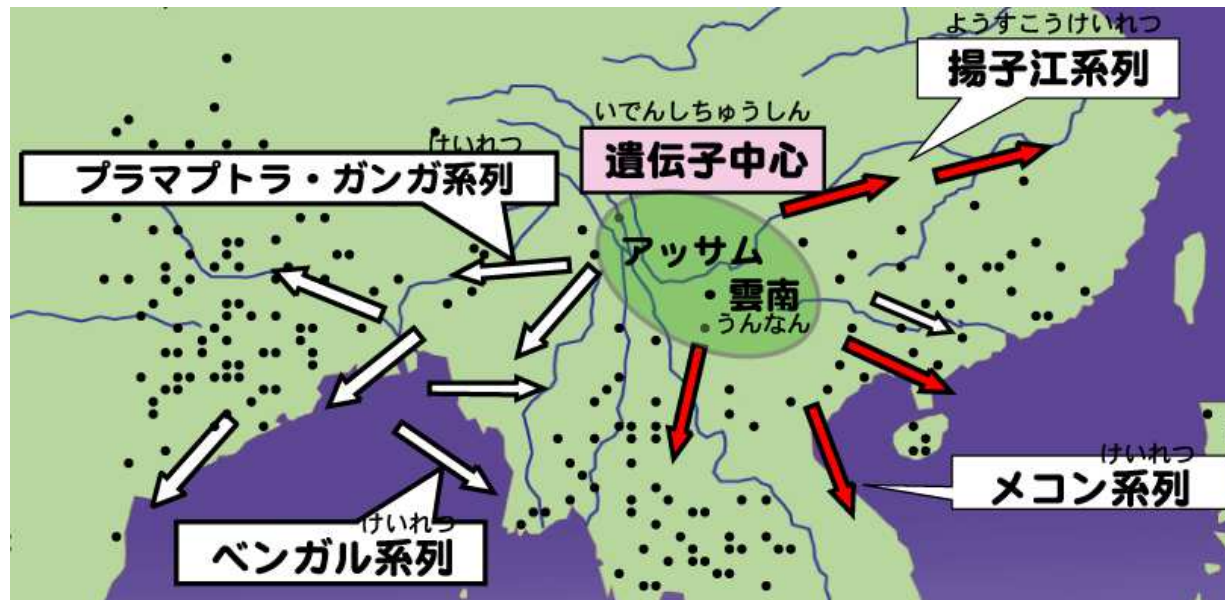
7. アッサム由来の道

インドではジャポニカ稲が長く栽培されていたが10世紀頃から次第に減少
北インドのジャポニカはアッサムから伝わったもの
アッサムは野生種、在来品種が多数存在…アッサムがインド栽培稲の起源

8. アジア栽培稲の起源と伝播

アジア稲の起源は「アッサム・雲南」

未分化品種の存在、野生稲の分布…ただし、実証的なデータは不足
雲南の稲は揚子江に沿って東方に伝播(揚子江系列) → 日本まで伝わる



佐藤洋一郎『イネの歴史』(2008)

1952年生まれ、京都大学農学部卒、国立遺伝学研究所、静岡大学農学部助教授を経て、現在、総合地球環境学研究所教授。『DNAが語る稲作文明』(1996)

1. 農業以前の稲

イネ科植物(キビ、ヒエ、トウモロコシ等)は被子植物(⇔裸子植物)

イネ属(オリザ属)には20種ある……大半は多年生

このうち我々が食べているのは「オリザ・サティヴァ」

初期の野生のイネは森に住む日陰植物……多年生で群落を形成→

株で繁殖(種子繁殖ではない) → 穂をつけず花が咲かない野生イネがある

その後森を出る → 浮稲、玄米が褐色(赤米)

2. ジャポニカの誕生とその後

野生植物→栽培植物(種まき、管理、遺伝的变化)

栽培化した稲は「オリザ・サティヴァ」(アジア)と「オリザ・グラベリマ」(西アフリカ)の二種

オリザ・サティヴァのなかにインディカとジャポニカがある

栽培化による変化……遺伝的多様性の低下、多年生から一年生へ進化

種子が大きくなる、非脱粒化、自家受粉性

稲の起源は長江の中下流域(ジャポニカ、1万年前)

2008年に稲の起源が東南アジアとする論文が出たが、考古学の成果と合わない

稲の栽培化はゆっくりと進んだ(数千年かけて)

3. インディカのおこりと伝播

インディカとジャポニカの区別は加藤茂苞(九大教授)が最初に行う(1928年)
岡彦一(国立遺伝学研究所)が両者の違いを遺伝的に解明

- ・インディカとジャポニカは異なる祖先から来た

- ・インディカとジャポニカの雑種は花粉や種子がうまく実らない(不稔性)

ジャポニカのイネが急速に広まったのは5000年前

しかし、中国産のイネ(温帯ジャポニカ)は熱帯ではうまく育たなかった

→熱帯の野生イネと自然交配を繰り返し「インディカ」が誕生した

熱帯での農耕の開始は温帯地域より相当遅かった ←食べるのに困らない

浮稲型水田漁労システム、天水田

中国ではインディカを「粳」(せん)、ジャポニカを「粳」(かん)と呼んでいる

インディカとジャポニカを種子の形で見分けることはできない

(←一般には細長い米を「インディカ」、丸い米を「ジャポニカ」とされている)

モチ米はジャポニカに属するものが多いが、インディカに属するモチ米もある

松尾孝嶺(東大教授)は、米を3つの品種群に分類(1953)

→ ①ジャポニカ、②ジャパニカ、③インディカ

渡部忠世はレンガの中の粳殻の形でイネ品種の変遷を研究(『稲の道』1977)

← しかし、粳の形で品種を特定できない ⇒ 誤った結論に達した

4. イネ、日本列島に渡る

日本列島にイネが来たのは縄文時代の中期か後期

縄文時代の遺構からイネのプラントオパール(植物細胞の珪酸体化石)や米粒が見つまっている

縄文時代に農耕が行われていた(←コクゾウムシの発見)

ただし、縄文遺跡に水田遺構はみつかっていない

縄文時代の稲作は小さな小川の河川敷、扇状地の裾で行われていた
弥生時代に入って「水田稲作」が伝わる

5. 南アジアのイネ

熱帯アジアにおける稲作開始は遅れた

←インド、インドネシアでは中国ほど古い稲作の遺跡がみつかっていない

2006年に「インドで8600年前のイネが出土」というニュース

←世界の専門家による検証、年代は誤っていないが栽培イネの証拠が欠ける
インダス文明の遺跡(4000年前)で稲のプラントオパールを検出

→インダス文明の時代にイネの栽培が行われていた→欧州やアフリカに伝播
ブータン、シッキムのイネ……盛永俊太郎はシッキム稲作起源説を主張

6. イネ、米国、豪州へ渡る

カリフォルニアの稲作は19世紀中ごろに始まった

←日本のイネ品種「渡船」と中国原産の品種から「カルローズ」が生まれた

ミシシッピのコメは熱帯ジャポニカ(フィリピンの品種)

豪州での稲作は19世紀中頃に始まった(中国人がカリフォルニア米を導入)

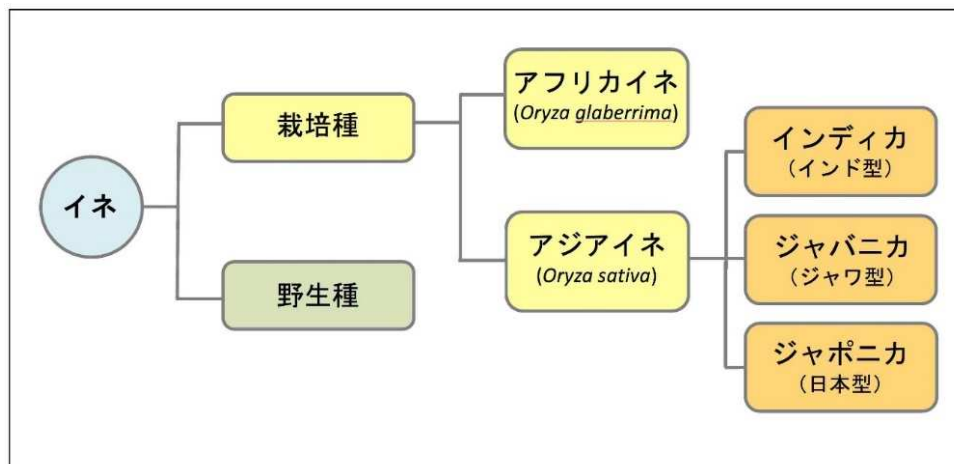
7. 未来へ

ハイブリッドライス(雑種強勢)…中国で広がったが(多収量)、食味が落ちる

稲作は環境調和型か? ……農薬、化学肥料の大量使用

減農薬、減肥料に向けた品種改良が必要

遺伝子組み換えイネの可能性



渡部武・陳文華編『中国の稲作起源』(1989)

中国における稲作の起源に関する主要論文を邦訳

渡部武は東海大学教授(早稲田大学卒)、中国文化史が専門

[中国稲作の起源に関する諸説]

① 雲貴高原起源説(中国南部雲南省)

② 華南起源説(ベトナム、タイと接する地帯)

③ 長江下流域起源説(河姆渡遺跡)

④ 黄河下流域起源説(夏王朝の禹)

①は、説得力はあるが考古学的証拠に欠ける。

②の地域には多年生野生種が分布するが、稲穀遺物が発見されていない。

③は、考古学の成果と野生稲の存在に依拠。

④は、生物学的根拠に欠け、賛成者は少ない。

「長江下流域起源説」で決着したわけではなく、長江下流域起源説を唱えた巖文明氏も、「栽培稲はインド、東南アジアなど多くの地域で独自に発生した可能性もある」と書いている。

「朝鮮と日本の稲作の起源は紀元前10世紀前後、ほぼ同時期であった」と指摘。

江蘇省南部の方言に日本語の「イネ」と共通の言葉がある。「コメ」は閩南語(びんなんご)と「穀米」と同じ…日本語は古代越族の発音(閩南語)とよく似ている。福建沿岸地方では「照葉樹林文化」の要素を多く見出せる。(←陳文華氏は福建省生まれ)

1. 丁穎「中国栽培稲の起源とその変遷」(1957)

丁氏は中国稲作学の父。

「インドの稲作の起源が中国より晚く、中国の稲がインドから伝播した可能性はない。」

2. 楊式挺「考古学発見から見た中国栽培稲の起源、変遷とその伝播」(1982)

「中国栽培稲の起源は今から7～8千年前」

3. 周季維「長江中・下流域出土の古稲の調査」(1981)

4. 嚴文明「中国稲作農業の起源」(1982)

「インドはこれまで栽培稲の起源の中心地と見なされてきた(パピロフの主張)」

「パピロフの見解は、主として植物分類学と遺伝学の視点から説明したもので、考古学的証拠について全く言及していない。」

「インドを水稻起源の唯一の中心とする説は、どうにも成立は困難である。」

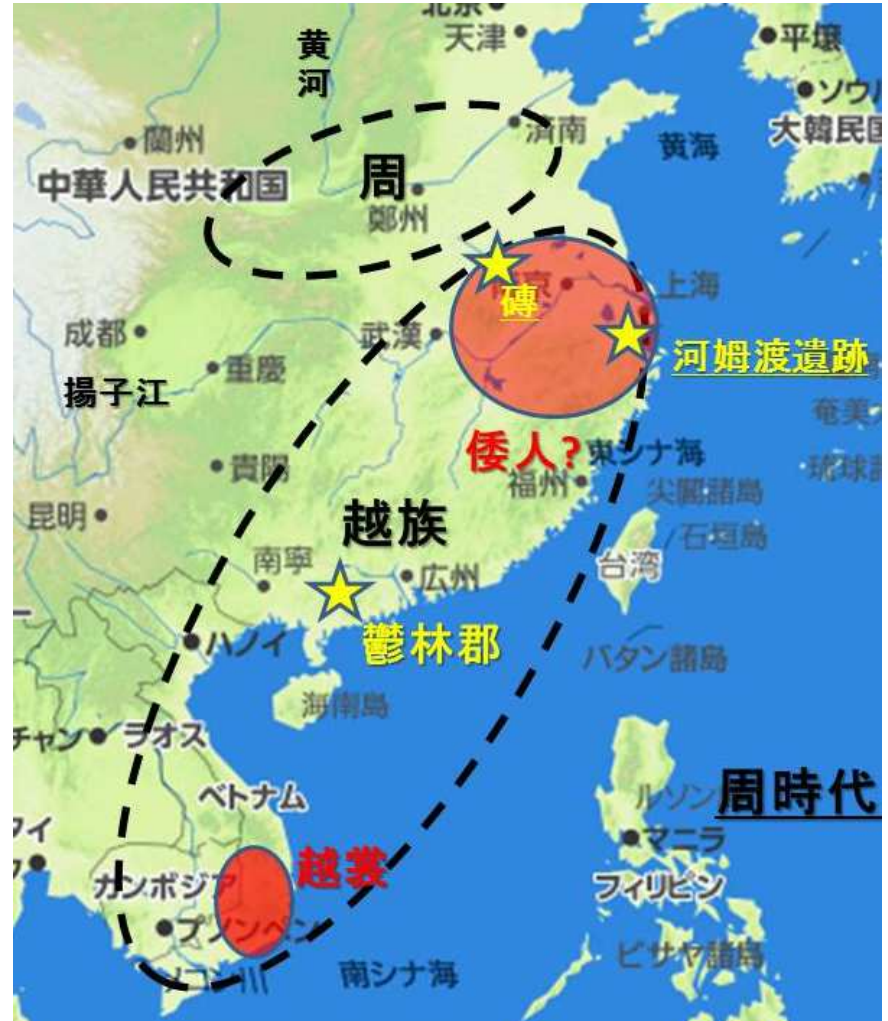
5. 游修齡「太湖地方における稲作の起源および伝播・発展に関する問題」(1985)

日本への稲作の伝播についても考察

6. 陳文華「漢代における長江流域の水稻栽培と農具の完成」(1986)

7. 彰世奨「「火耕水耨」新考」(1987)

漢代における中国南方の水稻栽培方式(草を焼き種をまく、水を注いで除草する)



4. 日本への稲作の伝来と伝播

安藤広太郎『日本古代稲作史』(1950)

1871兵庫県生まれ、帝国大学農学部卒(育種学)、農商務省農事試験場所長、東京帝国大学教授、帝国農会副会長、文化勲章受章。

稲の伝来……南方説と北方説を詳しく解説(考古学、言語、文献)

「支那に於いては古くより南支及江南地方に稲作が行われていたのであるから、これらの地方に居住する民族によって稲作が北支及東方日本、朝鮮に伝えられたのであろうことは容易に想像し得られる。」

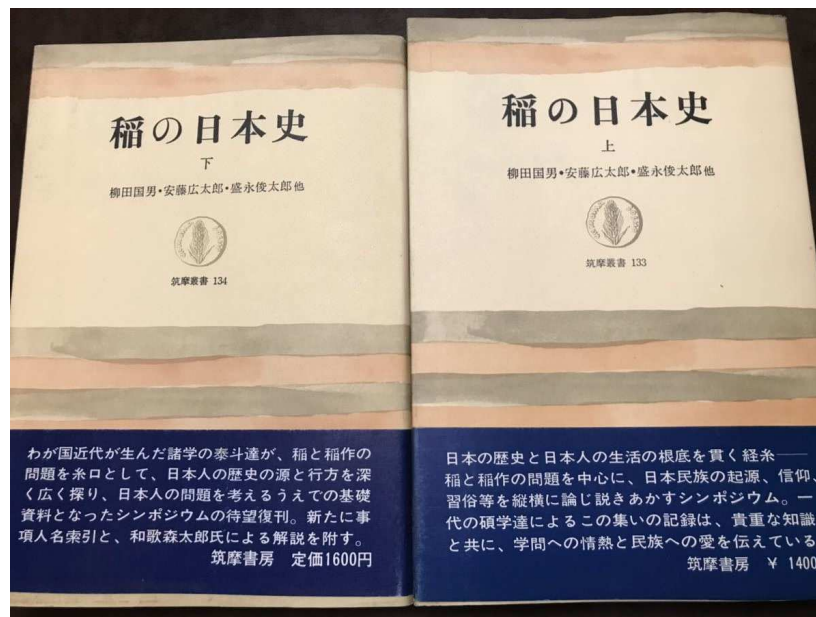
「江南地方海岸より対馬海流によって我北九州或は南朝鮮に来ることは…(中略)… **三経路中最も重要**であると思われる。」

「我国の弥生式文化期が西暦紀元を中心とした前後の一世紀で始まったとすれば、我稲作の創始も西暦紀元一世紀頃と考えて大きな誤りはなかろうと思う。」

- ① 稲の原産地はインドと南シナ、インドシナ。稲作はインドと南シナにおいて各独立して開始された。
- ② 米を常食とする南方民族(江南地方)が北九州及南朝鮮に移入して稲作を伝えた。その稲は日本型 稲(ジャポニカ)であった。
- ③ 稲作渡来の時期は、西暦紀元前1世紀頃で、平坦低湿な河辺、沼澤地で始まった。
- ④ 日本と南朝鮮は同じ時代に稲作を開始し、一方が他方に伝えたという関係ではない。

田植、農具、収穫、調整、稲藁利用

田の面積、生産量、災害、口分田、稲の語源





静岡県 登呂遺跡

藤尾慎一郎『＜新＞弥生時代－500年早かった水田稲作』(2011)

1959年福岡県生まれ、九州大学大学院卒(考古学)、国立歴史民俗博物館教授

炭素14年代法により日本における水田稲作の開始は従来説より500年早かったことが判明(調理用土器(甕)の表面についたススをAMS(加速器質料分析法)で計測)

「弥生時代」の開始時期も500年さかのぼらせる必要がある。

1. 新しい弥生の世界へ

土器形式の存続幅が変わる

水田稲作の初期に鉄器はなかった

日本列島における水田稲作の伝播速度が遅くなる

「土器で時代を区別できない」(佐原真)

藤尾氏の主張…水田稲作を行う人々が現れた段階で弥生時代に入ったとみなすべき

BC11～10世紀……北東アジアは青銅器社会→新天地を求めて日本に渡来

過去の発掘調査の再検証が行われる

→ 弥生時代の初期における鉄器の存在自体が保留・否定された

→ 弥生文化の前半は鉄器がなく石器のみの世界であった

2. 鉄器のない水田稲作の時代

弥生文化の前半(600年間)は鉄器のない時代であった(石器を使用)

明治期には日本列島で農業に鉄器を使用したのは古墳時代からと考えられていた

唐古遺跡や登呂遺跡で鉄器の痕跡が見つかる(1940年頃)

1950年代に弥生遺跡から鉄器そのものが発見される(熊本県)

「弥生時代の日本では青銅器よりも鉄器のほうが先に現れる」との主張

鉄器は国産か否かの論争

中国ではBC9－8世紀(西周後期)に鉄の生産が始まる

歴博の発表に対し鉄の視点から批判を受ける

「BC10世紀に日本で鉄器を使用したことはありえない」

過去の発掘調査の再検証が行われる

→弥生時代の初期における鉄器の存在自体が保留・否定された

→弥生文化の前半は鉄器がなく石器のみの世界であった

3. なかなか広まらなかった水田稲作

稲作の開始時期…九州北部BC10世紀後半、近畿地方BC7～6世紀

→ 近畿に稲作が伝わるまで300年かかった

瀬戸内西部BC8～7世紀、東北北部BC4世紀、関東南部BC2世紀

水田農耕民と在来型園耕民との併存が長く続いた

長い時間をかけて同化、融合が進んだ

4. 変わる弥生村のイメージ

縄文集落論、弥生集落論…人口、集落規模、集落の形成と存続、社会構造

土器形式の存続期間

5. 弥生文化の輪郭

多文化列島……異なる文化が長期間併存

続縄文文化

地域による文化の差異

水田稲作(米)……余剰生産物、税、交換財、儀礼・祭祀の対象

池橋宏『稲作渡来民－「日本人」成立の謎に迫る』(2008)

1936年生まれ、京都大学農学部卒(育種学)、農林省勤務後、千葉大学、京都大学、日本大学教授。『稲作の起源－イネ学から考古学への挑戦』(2005)

多年草の水生植物であるイネが**毎年株分けで殖やされて**利用されていくうちに栽培作物になった

水田稲作は漁労とともに発展、古代から水田稲作の発展を支えたのは長江の中下流域に住んでいた越(タイ系の人)であった

縄文人が水田稲作を受容したのではなく、**稲作技術を有した「稲作渡来民」**が日本に水田稲作をもたらした

定住農耕民に比べて遊牧民は移動力と戦闘力に優れており、文化的に遅れた遊牧民が定住農耕民を支配することが行われた(中国、朝鮮)

呉越の勢力が山東半島、朝鮮西南部に移動、水田稲作を行う集団は基本的には呉越人の流れの波及したもの

BC334年に越がソの攻撃にあって敗亡→この時に越人の一部が北に向い、日本に渡来して弥生時代の始まりに関わった(安藤広太郎、岡正男)

日本では稲作に先行する畠作農耕の明らかな証拠はない

長江・淮河地域には日本人の起源問題を解き明かすための未知の事実が埋まっている

日本語は基本的には「縄文語」であり、稲作渡来民は日本語に大きな影響を与えなかった

[日本の考古学の歴史] (齊藤忠『日本考古学史』(1974))

考古学前史……遺物に対する神秘観、古墳盗掘

[江戸時代]……遺物・遺跡への関心が高まる

- ・古事記、日本書紀の研究(本居宣長等)、 国史・地誌の編纂(水戸光圈等)
- ・新井白石『玉考』、『古史通』
- ・陵墓探索、墓誌・金石文の研究、松下見林『前王廟陵記』
- ・志賀島で金印発見(1784年)
- ・シーボルト『日本』(1832)……古代史が含まれていた

[明治期以降]

- 1873 文化財保存の太政官布告
- 1877 モースが大森貝塚発掘
- 1879 ハインリッヒ・フォン・シーボルト『日本考古学』(英文、(シーボルトの次男)
- 1882 上野に博物館設立
- 1884 弥生式土器発見、人類学会設立、神田孝平『日本大古石器考』
- 1895 考古学会設立
- 1910 東京大学で考古学の講義開始(坪井正五郎講師)

- 1910 邪馬台国論争……白鳥庫吉[九州説]vs内藤湖南[大和説]
- 1916 京都大学に考古学講座設置
- 1912-17 西都原古墳群発掘
- 1919 史蹟名勝天然記念物保存法 → 文化財保護法[1950]
- 1924 縄文式土器の編年研究
- 1936 唐古遺跡発掘
- 1947 登呂遺跡発掘
- 1948 日本考古学協会創設、江上波夫「騎馬民族征服説」
- 1949 岩宿遺跡発見(相沢中洋)
- 1951 板付遺跡発掘

坪井正五郎(1863-1913)……東京大学理学部卒(動物学専攻)、東京大学教授(人類学)

八木奘三郎(1866-1942)……東京大学人類学教室勤務(標本担当)、縄文土器研究

濱田耕作(1881-1938)……東京帝大卒(美術史)、欧州留学(考古学)。京都大学教授(考古学)

梅原末治(1893-1983)……同志社学校卒業後、濱田耕作に師事。京都大学教授(考古学)

山内清男(1902-70)……東京帝大で人類学を学ぶ。東京大学教授、「日本考古学の父」

森本六爾(1903-36)……在野の考古学者、『日本原始農業』(1933)

藤森栄一(1911-73)……八ヶ岳西麓で縄文遺跡調査→縄文農耕の存在を主張

小林行雄(1911-1989)……神戸高等工業学校卒業後、考古学を研究。京都大学教授。

[日本における農学・農業史の研究]

新渡戸稲造『農業本論』(1898)

横井時敬(1860－1927)……東京帝国大学教授、東京農大初代学長。

古島敏雄(1912－1995)……長野県生まれ、東京大学教授

『近世日本農業の構造』(1943)

『日本農学史』(1946)

『日本農業技術史』(1947－49)

『日本農業史』(1952)

『土地に刻まれた歴史』(1967)

飯沼二郎(1918－2005)……東京都生まれ、京都大学教授

『農業革命論』(1951)

『農学成立の研究』(1957)

『日本農業技術論』(1971)

『日本古代農業革命』(1980)